

2. 2019年度 西伊豆町報告

上田 信

4月・5月ならびに11月に現地での調査を行い、1月に都内のイベントを観察した。

1. 広域連携「西豆」

これまでの調査のなかから、西伊豆町枠内で地域創生を模索することの限界を強く認識するようになった。町は伊豆半島の西部に位置しており、伊東などの半島東部や下田などと比較して、首都圏からのアクセスが良くない。また、静岡市や名古屋市などの都市圏とも、交通の便が良くない。地域創生の成功例として取り上げられる島根県海士町、本プロジェクトで協定を結ぶ対馬市・羅臼町などのように、地域の個性を際立たせることで地域創生への関心を喚起することも、困難である。地域の魅力を対外的にアピールし、ESDを通じて地域住民が住み続けたり、いったん外に出た上で回帰したりすることを促したり、新規移住者を惹きつけたりするために、伊豆半島西南部全体のイメージを向上させる必要がある。こうした広域には、もともと「西豆（さいず）」という言葉が与えられており、具体的な範囲としては伊豆市土肥地区、西伊豆町・松崎町・南伊豆町が含まれる。

本年度は松崎町に調査の範囲を拡大した。松崎町と西伊豆町との関係は、非常に深い。西伊豆町には高等学校がなく、中学卒業後、進学を希望する生徒は、自宅通学を考える場合は土肥高校が松崎高校に進むことになる。松崎高校を中心に連携型中高一貫教育「西豆学」が2008年に少子化に対する対応策の1つとして導入され、現在も発展しながら継続されている。合い言葉「西豆の子は西豆で育てる」を掲げて、松崎高校と松崎町・西伊豆町の中学校の教職員が連携して、中学1年から高校3年まで通した6年間のシラバス（学習内容・指導計画）を編成して、教育を進めている。実際に西伊豆町の中学校の関係者からは、「西豆学」の一貫で総合学習の枠内で、西豆の自然と文化を知るプログラムが進められていることが確認されている。また、年一回松崎高校の体育館において、中高生による合同発表会が開催され、地域について調査した成果報告などが生徒主体に行われている。

2019年4月に現地を調査したときには、松崎町の地域おこし協力隊員の寺田健吾氏から話を伺う機会を得た。寺田氏は地域外の人が地域住民と作業をともにしながら交流する機会として「松崎ワーキングホリデー」<<https://readyfor.jp/projects/izuokoshi/announcements>>「松崎稲作塾」<<https://teradamatsuzaki.wixsite.com/matsuzakiinasakuju>>を主催しながら、伊豆全域に散らばる地域おこし協力隊関係者の連携を取ることの重要性を指摘し、クラウドファンディングで資金を集め、伊豆地域の協力隊員と情報交換会の場を立ち上げている。西伊豆町で調査しているときに、同町で協力隊として入ったものの、期間終了後に定住することができなかった事例も見ており、相互に共通する悩みを語

り合い、ときには支え合うネットワークの必要性を痛感してきた。寺田氏の試みは、協力隊を地域創生に活かす基盤を形成するための、一つの指針を提供している。

松崎町は三聖人として顕彰される幕末の漢学者・土屋三余、明治期実業家・依田佐二平、十勝平野開拓者・依田勉三を出した。養蚕業を地元で興した依田佐二平の邸宅は、現在「旧依田邸」として一般公開されているが、その意匠に特色があり、西豆の拠点として活用を図ることが期待される。

2. クールタウン西伊豆

地球温暖化の影響が顕在化しつつあるなかで、温室効果ガス CO₂ の排出を抑制する必要性が国際的な課題となっている。そのなかで西伊豆町では、2014 年の大水害の復旧に関わり、その後も継続的な関係を維持している「国際学生ボランティア協会（IVUSA）」の学生が、「クールタウン」創設を目指した活動を展開している。

間伐材や建築廃材を簡易な方法で炭化する装置によって、大量の炭を焼く。観光スポット「黄金崎」のマツ林の再生に用いるため、2 月に 100 人ほどの学生が全国から集まり、林床を清掃した後に、弱ったマツの根元に炭を入れている。宇久須地区では休耕田を借りて大量の炭を投入、オリゴ糖を多く含む健康食材ヤーコンを栽培し、6 次産業の確立に取り組んでいる。ヤーコンはそのままでは販路が限られるため、南伊豆に所在する業者と連携して、フリーズドライによって粉末状に加工するルートが、今年度に作られようとしている。

炭を入れた畑で無農薬・減農薬で栽培した野菜を、「クールベジ」という認証を付して販売する新事業も構想されている。町役場が中心となって、直販所の創設が予定されており、「クールベジ」も出店されるものと期待される。

地域おこし協力隊のなかに、地域の少量多品種の旬の食材を都内のレストランに直接に届ける事業に取り組んでいる方がおり、均一大量生産が一般的であった従来の農業とは異なる事業形態が生まれる可能性が秘められている。野菜のほかに、人口減少もあって増え獣害をもたらすシカを、狩猟・解体・加工してジビエ料理の食材として提供する試みも、地域おこし協力隊メンバーが行っている。

環境 NPO「緑の地球ネットワーク」と連携し、宇久須地区の芝山において珪石採掘の緑化に、炭を用いる実験も進んでいる。採掘跡地は強酸性であり、しかもシカの食害が深刻で、ヤシャブシやマツを用いた緑化は成果を上げられなかった。酸性に強く食害を受けないシキミ・アセビを炭とともに植栽した結果、活着率は高くはないものの、確実に成長していることが確認できた。

現時点ではこのクールタウン構想は、一部の関係者のあいだで語られているに過ぎないが、今後は地域内外に拡げて、地球環境を念頭に置いた6次産業のモデルを、西伊豆町が提示することが期待される。

3. 都内在住出身者・ファンとの連携

西伊豆町は教育に熱心な気風があり、都内には多くの出身者が暮らしている。町では出身者やファンとのネットワークを創り、その知見を地域創生事業に活かす試みが進められている。都内で「西伊豆町民の会」を開催するなど、地道な取り組みが行われている。

(うえだ・まこと 立教大学文学部教授／同ESD研究所所員)